

日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow



Hironao Hamada

1977年高知県生まれ。江戸時代より和紙づくりを営む家に生まれ、20歳のころに祖父・濱田幸雄氏の手伝いを始め、やがて弟子入り。現在は土佐典具帖紙を再度世に広めるため、さまざまな挑戦を続けている。



土佐典具帖紙(とさてんぐじょうし)

良質の水や原料に恵まれた、高知県の町でつくられる良質の和紙で、明治初期に生まれる。手漉和紙では「世界一薄」とされる反面、大変丈夫なため欧米に輸出されるようになり、地場産業として発展した。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版 パソコンやタブレットでもご覧になれます。本紙掲載以外に、多数の若者たちをご紹介します。

アットホーム明日への扉 検索



TV番組 ディスカバリーチャンネル(CS) 冠番組 「アットホーム presents 明日への扉」放映中 毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!!

ディスカバリーチャンネル「アットホーム presents 明日への扉」放送5周年記念番組 好評公開中!

## 土佐典具帖紙職人

濱田洋直氏

人間国宝の技を継ぎ、世界が認めた和紙を漉く。

土佐・高知の山あいに位置する、「いの町」。千年以上も前より和紙の産地であったこの町に、土佐典具帖紙という手漉和紙がある。カゲロウの羽に例えられるほど極薄ながら、繊維が複雑に絡み合い破れにくい。かつてはタイプライター用紙として世界中から引き合いを受けた。

濱田洋直さんは、故郷の伝統産業を未来に残そうとする若き職人。人間国宝である祖父に弟子入り以来、その技を継承すべく修業を積んできた。

土佐典具帖紙づくりは、不純物を抜くため、楮の皮を水で戻し、煮ることから始まる。上質の和紙は千年持つとされるが、それは楮の繊維だけで構成され、虫の好むアクなどが含まれないためという。

つぎに、また茶色い楮を湧き水にさらす。清らかな水に洗われ、日光に照らされることで楮は次第に白くなるが、所々に黒みやチリが残る。それらを数日かけて取り除き、ハンマーで打って繊維をほぐすと楮は真綿のようになる。

いよいよ紙漉きの開始だ。楮を混ぜた漉き舟の中で畳一帖ほどの楮を上下左右に動かすたび、水が均等に波立つ。これはトロロアオイという草の根が含む粘液によるもの。粘り気を持たせた水を操ることで、楮の繊維を楮全体に行き渡らせるのだ。

濱田「高校卒業まで原料の楮を触ったこともなく、最初はほんの手伝いのつもりでした。しかし、人間国宝に認定されても全く変わらない祖父を見て、一途に同じ仕事を続けることが大切なんだと感じ、自分もこの仕事を続けていこうと決めました」

一枚の和紙を漉く時間は20秒程度だが、楮を動かす作業は絶え間なく続く。修業を始めたころはドアノブも

握れないほどの腱鞘炎に悩まされ、果たしてやっていけるだろうか。何度か思ったという。しかし、断念の努力により、ついに代を譲られるまでになった。

目標は?

濱田「弟も手漉和紙の仕事をしていて、土佐典具帖紙とは異なる落水紙という和紙を漉いています。いつかは、和紙といえど「浜田兄弟和紙製作所」といわれるほどの存在になりたいですね」

偉大なる祖父をはじめ、先人が歩んだ道は果てしなく長い。若き職人たちの歩みは決して止まらない。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2013年6月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!! 自然豊かな郷で伝統の継承に挑む姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。